

②⑦ 香取・鹿島の社叢林

「香取の海」に面した東国きっての名社の社叢林。

【概要】大和朝廷の東国（蝦夷）経営の拠点であり、陸奥国への要衝であった両神宮の社叢林は、古来より大切に守られてきた。鹿島神宮（樹叢は44ha）の社叢林は、県内（茨城）随一の常緑照葉樹林で、スギ・スダジイの巨樹・古木が多いほか、暖地性の植物が多く見られる。香取神宮の森は、スダジイを優占種とする自然林とスギの人工林から構成され、どちらも県の天然記念物に指定されている。

【森林の特徴と見所・歴史文化】

利根川の下流域は、利根川水系とは全く別の、鬼怒川（毛野川）、小貝川（子飼川）の水系で、銚子を河口とした大きな内海（うちつうみ 香取の海）であり、江戸時代まで下総・常陸国境周辺に存在していた。霞ヶ浦（西浦・北浦）・印旛沼・手賀沼をひと続きにした、広大な規模の内海で、面積は東京湾に匹敵するほどだった。「香取の海」は、淡水と海水の入り混じった汽水域で、その範囲は、佐原の地先まで広がっていた。

この地域にある、常陸国一ノ宮の鹿島神宮、下総国一ノ宮の香取神宮は、息栖神社を加え、東国三社と呼ばれ、関東きっての名社である。この地は、大和朝廷の東国（蝦夷）経営の拠点であり、陸奥国への要衝であった。このように、古い歴史をもつ鹿島神宮・香取神宮の森は、「香取の海」に面し、現在は内陸にありながら、海岸林の面影を残している。

鹿島神宮の森（昭和49年天然記念物指定）は約44ha、県内（茨城県）随一の常緑照葉樹林で、約800種の植物が生育し、特に暖地性の植物が多く見られる。高木層は、モミ・スギ・スダジイ・タブノキ・クスノキ・カシ類など、低木層は、ヒサカキ・モチノキ・シロダモ・モッコク・アオキ・アリドオシなどである。参道の両側の鳥居付近では、タブノキ・クスノキの大木が目を引き、参道の両側には、スギ・スダジイ・モミの大木が並ぶ。本殿裏のご神木のスギは、樹高43m、根周囲12mの巨木で、樹齢千年と言われている。御手洗池周辺には、カヤ・モミ・スダジイ・タブノキなどの樹高20m以上の混生林が見られる。

香取神宮の森は、約3.5ha、ここも古くから神宮の森として大切に保護されており、昭和38年千葉県天然記念物に指定されている。この地域

は、北総台地の北縁にあたり、利根川によって徐々に浸食された地域である。台地上面は標高約40mであるが、浸食が進んで谷津田が入り組み、島状となった台地も多く、香取神宮を含んだ台地もその一つで、亀甲山と呼ばれている。森は、スダジイを優占種とする自然林とスギの人工林とから構成されている。本殿の周辺には巨木が多いが、特にご神木とされるスギは、この地域最大のもので、目通り幹周は約7.4m、高さ35mで、樹齢は千年と言われている。この付近には、スギ・スダジイ・アカガシ・イチョウ・ケヤキ・イヌマキ・ナギなどの巨木・古木があり、いずれも樹齢数百年と言える。林床には、県内では北限といわれるアリドオシがある。

コースで見られる主な植物等

【木本類】

モミ・スギ・スダジイ・タブノキ・クスノキ・カヤ・カシ類・ケヤキ・イチョウ・イヌマキ・ナギなど、低木層は、ヒサカキ・モチノキ・シロダモ・モッコク・アオキ・アリドオシほか

【草本類・シダ類】

ホソバカナワラビ・シンミズヒキ・コ克蘭・着生ランなど 希少種もある

【一口メモ】

【鹿島神宮の大鳥居】

2011年の東日本大震災では、大鳥居と御手洗池入口にあった鳥居が倒壊した。倒壊前の大鳥居は、花崗岩でできていたが、平成26年6月に、鹿島神宮境内の社叢林から、5本のスギの巨木を伐採して、鹿島神宮本来の木製で再建された。

②鹿島神宮・香取神宮 写真



鹿島神宮大鳥居 社叢林の杉で再建



鹿島神宮 御手洗池 湧水



鹿島神宮 巨樹の多い参道



香取神宮 拝殿



鹿島神宮本殿 ご神木は杉の巨木



香取神宮 本殿